

2022年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2023年5月20日

2. 提出者氏名：文可依

3. 申請した研究テーマ：

「中国のフェミニズム行動派の運動におけるフェミニズムの政治と性的マイノリティ」

5. 研究活動報告

2012年頃から、中国の都市部やオンライン空間で、若者を中心としたアクティビストたちが「フェミニズム行動派」を名乗り、一連の運動を行った。中国において、性的マイノリティの権利をめぐる問題は、行動派の運動で初めてフェミニズム運動の内部で扱われるようになった。本研究は、フェミニズムと性的マイノリティの関係という問題を中心に、行動派の運動におけるフェミニズムの政治を考察した。

行動派の運動は、積極的にSNSなどのプラットフォームを活用し、オンライン空間で情報発信を重視する運動である。本研究では、行動派の運動に関連するオンライン上の資料を収集した。これには当時のアクティビズムをアーカイブした写真や録音・録画、当事者がSNSなどのプラットフォームで発信した文章やステートメント、ポッドキャストが含まれる。また、当時の新聞記事や、アクティビズムとその背景に関する論文や批評文章など、多角的な情報も収集し、分析を行った。

本研究は、まず行動派の運動と性的マイノリティ女性が主導した「拉拉運動」との交流の経緯を概観し、また、その運動におけるフェミニズムと性的マイノリティ運動の「連帯」とその背後にある齟齬や緊張関係をめぐる言説を取り上げ、さらに、性的マイノリティの権利に言及した二つのアクションを分析した。以上の考察によって、ジェンダーとほかの様々な要素による不平等の交差性を重視するような政治が行動派の運動と拉拉運動の交流の中で探究され、フェミニズムと性的マイノリティの間にこれまでなかった連帯の可能性が示されていることが明らかになった。一方、結局のところ交差性の視点が軽視され、フェミニズムと性的マイノリティの齟齬を温存されたままとなり、社会構造変革の可能性も損なわれていることも浮き彫りになった。最後に、#MeToo運動以降の現在中国のフェミニズム運動においては、交差性の欠落がもたらした問題がさらに外部からのバックラッシュによって悪化しているような現在中国のフェミニズム運動が直面している危機を明白にした。まさにこのような状況において、行動派の運動における交差性の政治の探究と欠落を再検討することは、現在危機に満ちた中国のフェミニズム運動、ひいては、ほかの地域の様々な危機に向かっているフェミニズム運動を再考する一助となる可能性があることを示した。

本研究の成果は以下の2点で公表した。

学会発表：

・「中国におけるフェミニスト・ポリティクスと性的マイノリティ：フェミニズム行動派の運動を中心に」、国際ジェンダー学会、オンライン、2022年9月

学術論文（査読あり）：

・「フェミニズムの政治を開く：中国のフェミニズム行動派の運動と性的マイノリティ」、『ジェンダー研究』(25)、東海ジェンダー研究所、pp. 119-142、2022年2月28日